

## アナウサギの日本飼育史(日本絵画でたどる)

桜井 富士朗<sup>1</sup>

家畜、実験動物及びペットとして広く飼育されているウサギはアナウサギであり、イベリア半島原産で日本在来のノウサギとは種が異なる。アナウサギの日本伝来は室町期の天文年間(1532-1555)といわれ、江戸期になると、着色絵画に白ウサギがしばしば登場するようになり、目が赤いアルビノというアナウサギの特徴を持つものが現われる。筆者は、ウサギの描かれた江戸絵画を照覧し白ウサギ・アルビノの特徴から、日本でアナウサギが最初に描かれた時代を特定することを試み、江戸中期の天明年間(1781-1789)にはアルビノのアナウサギが日本に伝来していることが確認できた。

## 1. はじめに

日本在来のウサギ目の動物は3属4種で、ナキウサギ科では北海道のエゾナキウサギ(ナキウサギ属 *Ocotona hyperborean yesoensi*)、ウサギ科では南西諸島のアマミノクロウサギ(アマミノクロウサギ属 *Pentalagus furnessi*)、ニホンノウサギ(ノウサギ属 *Lepus brachyurus*, hare)とエゾユキウサギ(ノウサギ属 *Lepus timidus ainu*)が棲息している。(表1)

獣医療で一番なじみのあるアナウサギ(カイウサギ、アナウサギ属 *Oryctolagus cuniculus*, rabbit)は、スペインイベリア半島の原産で、巣穴を掘らないノウサギとは異なり、短く太い前肢で地中に穴を掘り、ワーレンという巣穴を作るのでアナウサギという。ノウサギの妊娠期間は約42日で、新生仔は毛も生え眼も開いている。アナウサギの妊娠期間は約30日で、新生仔は毛が生えておらず眼も開いていない。また両者は交配しない。<sup>1), 2)</sup>

日本の文献に記された獣医療の嚆矢は、古事記に記された「大国主命と因幡白兔」であるが、<sup>3)</sup> 絵本や童画で紹介されているものを見ると、シロウサギの瞳が赤いアルビノが描かれていることが多い。ノウサギの夏毛は灰褐色か暗褐色で、東北・

---

SAKURAI Fujiro : The History of European Rabbits which were Brought to Japan (According to Old Japanese Paintings)

1. 帝京科学大学 連絡先: 桜井富士郎 桜井動物病院 〒132-0025 東京都江戸川区松江3-11-17  
TEL : 03-3652-9101 (2015年11月20日受付・2015年12月20日受理)

北陸の多雪地帯では耳の先端の黒色部を残して白色となるが、アルビノではないので瞳は黒色である。古事記の時代にアナウサギは日本にいないので、瞳は黒く描かれなければならない。

本研究は絵画に描かれた特徴から、アナウサギが日本にいつ頃から伝来したかを中心に、文献や絵画などからアナウサギに関わるエピソードを紹介するとともに、時系列に日本画を照覧し、アナウサギが初めて描かれた時代を特定していく試みである。

表1 ウサギ目(日本動物大百科事典1, 哺乳類I, 平凡社より)

|                    |                              |                                 |   |
|--------------------|------------------------------|---------------------------------|---|
| ウサギ目<br>LAGOMORPHA | ナキウサギ科<br><i>Ochotonidae</i> | ナキウサギ属<br><i>Ocotona</i>        | エゾナキウサギ<br><i>Ocotona hyperborean<br/>yessoensi</i> |
|                    | ウサギ科<br><i>Leporidae</i>     | アマミノクロウサギ属<br><i>Pentalagus</i> | アマミノクロウサギ<br><i>Pentalagus furnessi</i>             |
|                    |                              | ノウサギ属<br><i>Lepus</i>           | ニホンノウサギ<br><i>Lepus brachyurus</i>                  |
|                    |                              |                                 | エゾキウサギ<br><i>Lepus timidus ainu</i>                 |
|                    |                              | アナウサギ属<br><i>Oryctolagus</i>    | アナウサギ<br><i>Oryctolagus cuniculus</i>               |

## 2. 研究と結果

初めに、童話やインターネットの検索などを用いて無作為抽出した「大国主命と因幡白兔」の画像中、ノウサギであるべき因幡白兔を「白ウサギで黒目」の組み合わせを正解とし、「白ウサギで赤目」の例(図1)をアルビノのアナウサギの引用による誤認、毛色の異なるもの、瞳に色が不明なものを「不明」と分類したところ(ノウサギの冬毛による白ウサギの特色である「耳先端の黒色」は、判定には用いない)、正答率22%、誤認率62%、不明16%という結果が得られ、ノウサギのイメージがアナウサギと著しく混同されていることが明らかになった。(図2)

アナウサギの繁殖力は旺盛で、食糧として生きたまま航海に出て、島などに置



図1 『かみさまのおはなし』，大阪府神社庁発行

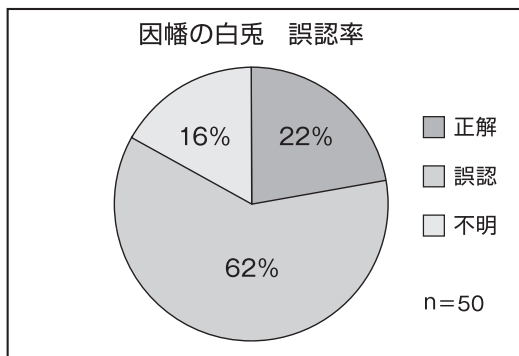


図2 因幡の白兔，誤認率(筆者ら調査，2015年)

き去りにされた群が天敵の不在などで，大繁殖し島の生態や地形まで変えてしまうことがある。

オーストラリアに持込まれたアナウサギは，ウサギ10頭でヒツジ1頭分に相当する牧草を食い荒らすので，オーストラリア政府は，(わが国では家畜伝染病予防法

の届出伝染病である) 兎粘液腫ウイルスで駆除をはかった歴史さえある。近年、瀬戸内海の久野島(広島県竹原市)ではアナウサギが増え、「ウサギの島」として観光の目玉にしているが、一部の例外を除いて、本邦では逃げたアナウサギが野生下で定着しないのは、高温多湿に弱いこと、山岳地帯が多く里山や中山間地帯にはイタチ・テン・タヌキ・キツネ・ヘビなどの天敵が多いことなどが挙げられる。<sup>4)</sup>

アナウサギとノウサギのイメージの混同は、野生下で捕獲したアナウサギを(野外で捕えたので)ノウサギと呼ぶ例などで起こるが、これらは専門家でさえ誤謬を起こしている。<sup>5)</sup> また、いつ頃に伝来したかの成書の記述にはあいまいなところが多く、意図的に議論をさけているようにも思われる。<sup>6), 7), 8)</sup>

### 3. 事例検討

次に、美術書や美術館などの資料により、ウサギが描かれている文献や日本画を時系列で検討して、以下のような特徴(表2)からノウサギとアナウサギとの分類を試みた。

表2 アナウサギとノウサギの外見的特徴の違い

- ノウサギは後肢が太く、アナウサギは前肢が太い
- ノウサギの冬毛では、耳の先端が黒く瞳も黒い
- 赤目の白ウサギは、アナウサギである
- アナウサギは群を作る、ノウサギは群を作らない

#### (1) 鳥獣人物戯画(高山寺蔵、鳥獣戯画展図録より)(図3)

鎌倉期に描かれた墨絵、作者は鳥羽僧正とされているが不明。

墨絵のため、瞳の色は墨で描かれているので黒いが、耳先端部の黒色部と胸部の長毛が描かれ、ノウサギの特徴がしっかり確認される。



図3 鳥獣人物戯画(鳥獣戯画展図録より)

(2) 扇面月兔画賛(本歌は畠山美術館蔵：写し)(図4)

本阿弥光悦(永禄元年-寛永14年, 1558-1638)

本阿弥光悦は江戸初期の人。刀剣の研磨, 鑑定を業としたが, 「寛永の三筆」と称され, 書や陶芸に秀でた。

兔は満月の日に妊娠するとの故事と関わる。<sup>9)</sup> 白ウサギだが瞳が黒色なのでアナウサギとの特定はできず, ノウサギと判断した。

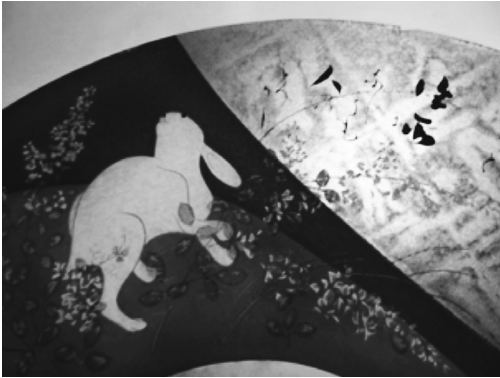


図4 扇面月兔画賛(写し)

賛：袖の上に誰故月ハやとるそと  
餘所になしても人のとへかし

(3) 兔福寿草図(天明2年, 1782, 石川県立美術館蔵)

岸駒(がんく：宝暦6年-天保9年, 1756-1838)

岸駒は江戸中期から後期の絵師, 岸派の創始者, 虎の画は「岸駒の虎」として有名。

白兔が2頭, 野生色1頭が群れていることから, アナウサギの特徴であると言えるが, 白兔の瞳の色が赤目がどうかの判定が出来ず, 判定不明とした。

(4) 木賊兔図(天明6年, 1786年, 静岡美術館蔵)  
(図5)

圓山応挙(享保18年-寛政7年, 1733-1795)

白兔2頭, 白黒ブチ1頭が群れているところから, アナウサギの特徴であるとも言えるが, 白兔の瞳の色が赤目かは判定不能。



図5 木賊兔図

(5) 百兔図(天明4年, 1784年, 個人蔵)(図6)

圓山応挙(享保18年-寛政7年, 1733-1795)

群をなし、白色赤目のアレビノの特徴が確認できる。全頭107頭、白色で赤目71頭(66%), 黒色12頭(11%), 野生色24頭(23%)。

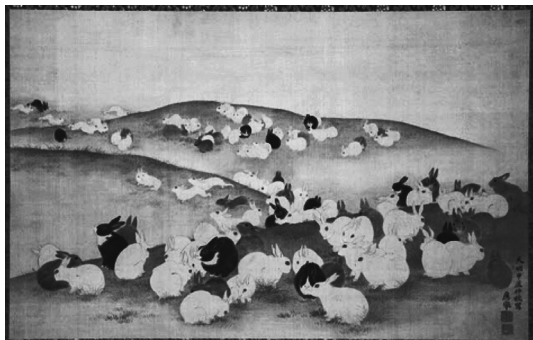


図6 百兔図(上:全体図, 下:部分)



#### 4 考察

日本の獣医療の嚆矢である「因幡の白兔」の故事が、絵本やメディアで取り上げる時に誤認が多いので、ノウサギとアナウサギとの混同による誤謬率を調査した結果62%にも及んでいることが判った。次にアナウサギの日本への伝来を調べたが、現時点ではっきりとした資料には出会わなかったので、「アルビノ(白兔で赤目)」、「群生」というアナウサギの2大特徴を中心にして両者の鑑別を、美術館・美術書・個人資料等の「日本絵画」でたどり試みた。その中から、天明4年(1784)に、圓山応挙によってアナウサギの特徴が明瞭に描かれていることが判明した。さらなる追跡調査が必要だが、現時点で年代が確認できる最古のアナウサギ画と考えられる。

## 註

- 1) 賀茂儀一：『家畜文化史』家兎 p903-915, 法政大学出版局(1973)
- 2) F. E.ゾイナー：『家畜の歴史』ウサギ(兎)p464-472, 法政大学出版局(1983)
- 3) 中村洋吉：『日本獣医学史』p8, 養賢堂(1990)  
「大国主命と因幡の白兎の故事は、獣医術に関する記録の嚆矢であって、……」
- 4) 南方熊楠：『十二支考』兎に関する民族と伝説 p97, 東洋文庫, 平凡社(1972)  
「日本に熟兎を養うこと数百年なるもかかる患害(うれい)を生ぜぬは土地気候等が不適なは勿論, 生存競争上その蕃殖を妨ぐるに力ある動物が多いゆえと惟う。」
- 5) 直良信夫：『日本産動物雑話』炉辺叢話ノウサギ, p322-324, 有峰書店(1975)  
「……二カ月後のある日, 私はこの兎(道端のくさむらで捕獲したノウサギのこと, 桜井注)の発情を知ったので飼兎の牝を交配してみた。それから, こげ茶と黒の子が八頭生まれた。」
- 6) 赤田光男：『ウサギの日本文化史』p4, 世界文化社(1997)  
「……右の野生ウサギ以外に, 明治以降多数のカイウサギが到来した。」
- 7) 五十嵐謙吉：『十二支の動物たち』p89, 八坂書房(1998)  
「カイウサギの最初の日本上陸は, 天文年間(1532-1555)とのことです。明治二年(1869)に中国から南京兎(品種不明), 四年にアンゴラ種が入るなどし, 五年には兎ブームが起きました。」
- 8) 川道武夫：『ウサギがはねてきた道』p14, 科学選書15, 紀伊国屋書店(1994)  
「カイウサギは野生のアナウサギを家畜化したもので, 日本には一六世紀頃オランダからきたとされる。」
- 9) 南方熊楠：『十二支考』兎に関する民族と伝説 p99, 東洋文庫, 平凡社(1972)  
「『博物誌』には「兎, 月を望んで孕み, 口中より子を吐く。故にこれを兎と謂う。兎は吐なり」, 「『楚辞』に顧兎とあるは, 注に, 顧兎月の腹にあるを天下の兎が望み見て気を感じて孕む, と見ゆ。」

## Summary

### The History of European Rabbits which were Brought to Japan (According to Old Japanese Paintings)

SAKURAI Fujio<sup>1</sup>

Pet rabbits, European rabbits, which are native on the Iberian peninsula, are known as farm and experimental animals in Japan. Japanese hares, which are native to Japan, are different from the European rabbits. It was believed that the European rabbits first came to Japan in Tenbun era(1532-1555, during Muromachi period). White-colored rabbits often appeared in Japanese artworks

from Edo period. They were not only white-colored but also having red eyes, characterizing the European rabbits. I tried to determine the first artwork which showed European rabbits. By studying some paintings from Middle Edo period (Tenmei era, 1781-1789), I can determine that albino European rabbits were brought to Japan in the period.

1. Teikyo University of Science. Correspondence to : SAKURAI Fujiro Sakurai Veterinary Hospital 3-11-17 Matsue, Edogawa-ku Tokyo 132-0025, Japan. TEL : 03-3652-9101